

新生アイシンが未来を切り開く

執行役員

大下 寿人

Morito Oshita



自動車業界は、100年に一度の大変革期と、ここ数年間言われ続けています。これまでのやり方では、生き残れない状況です。変化のスピードは益々速くなっており、未来に向かって我々は自ら変革を進めていかなければなりません。その手始めとして当社は、CASEに対応する企業構造を構築するため2021年4月にアイシン精機とアイシンAWが経営統合を行い新生アイシンが誕生しました。アイシンは、「移動に感動を、そして未来に笑顔を」をグループ経営理念に社員一人ひとりがチャレンジする企業に生まれ変わろうとしています。つまりアイシンのフルモデルチェンジが始まったということだと考えています。風土も仕事のやり方も異なる企業が真に融合したときに、その力が発揮され、お客様のニーズに応えられる価値を提供できるものと信じています。このような状況下で私は若い力に期待しています。若手のチャレンジこそが理念の提供価値である「お客様の期待に応える価値を生み出す」原動力だからです。

チャレンジをする上で、私がお願いしたいのは「知らざるを知らずと為す。是知るなり」ということです。現実を受け止め、弱さも受け入れ、自分らしい戦い方をすることです。立ち位置を理解すれば、打ち手、準備が変わります。チャンスは準備していないところには訪れません。そのため、日頃から外に目を向けて仕事をする必要があります。外に目を向けるというのは、市場環境や世の中の動向に敏感であること、他社の情報をつかむことも同様です。グループウェイにある「慣例にとらわれず最善を考えよう」「新しい潮流やニーズをつかもう」は、まさにこうした行動を示しています。もちろん、その前提には未来への羅針盤となる理念「移動に感動を、未来に笑顔を」があります。これにどう貢献していくか、外に目を向けながら自ら技術開発の成果を発信し、弱みをどうやって補い、強みを活かし、どう価値を提供できるかを考えながらどんどんチャレンジしていただきたいと思います。

さて当社では、直近の課題として「カーボンニュートラル」、「電動化」、「ソフトウェアファースト、DX」の3つを重点領域として取り組みを加速しています。その中でカーボンニュートラルは、待ったなしの課題であり、本技報でも取り組みの一端をご紹介すべく、特集に取り上げました。製造業である当社は、鋳鉄や鋳造といったCO₂排出の多い事業を持っていますが、2050年カーボ

ンニュートラルは必須です。その過程となる2030年のCO₂削減目標は50%以上と設定しています。この目標を達成するために、「減らす(省エネルギー技術)」「使う(再生可能エネルギー活用)」「創る・集める(CO₂削減貢献技術)」を軸にカーボンニュートラル達成に向けた取り組みを進めております。具体的な取り組みとして、工場から排出したCO₂を固定化して再利用する技術や面積比5分の1ほどの軽量の太陽電池の全工場導入、水素を燃焼させた熱から電力を作るシステムなどが既に実現可能なレベルで挙がっております。また、カーボンニュートラルをより加速させるために、「CN推進センター」を2021年8月に新設し、関連部門を全て集約することで推進力を高めています。

次に世界の潮流となりカーボンニュートラルの取り組みにおいて最重要テーマである電動化ですが、当社の強みは、部品メーカーとして唯一、「HEV」「PHEV」「BEV」「FCEV」といったエコカーに関する電動化商品をフルラインアップで揃え、様々な地域に適したユニットを提供できることです。これまで長年磨き続けたATの技術を軸に、ハイブリッドシステム、eAxleなど多くの電動化商品を世に送り出してきました。今回の統合を更なる推進力として、グループ内の技術の融合を図り、パワートレインだけでなく、車両全体から見たCO₂削減につながるシステム開発を進めています。また、グループ内に無い技術は、社外との協業により実現していき、システムとしてCO₂削減に貢献できる技術を提供していけるように進め、電動化を通じてカーボンニュートラルを実現し、お客様、社会、地球に貢献していきます。

3つ目のソフトウェアファースト、DXとは、「実現したい新たな価値に対してソフトウェアの構造を整理し、ソフトウェアの進化やスピードを重視して、ハードとソフトを分離、ソフトウェアを先行して開発する」ことです。当社はパワートレインユニットやパワースライドドア、サスペンションなど、メカ(ハード)とそれを動かすソフトで構成された商品を多数もっています。私たちアイシンの役割は、これらとともに今後Over The Air(無線経由でプログラムを送受信)でアップデートされるクルマの性能向上に追従できる商品を供給することです。更に、当社のもつパワートレイン、走行安全、車体部品の各領域を横断的に繋いで統合制御することで、ユーザー目線で新しい価値を提供していきます。また、ソフトウェアファーストを進める上で、開発スピードを格段に加速させる必要があります。ここで必須となるのが設計開発におけるDX(デジタルトランスフォーメーション)です。DXによって、設計開発の加速のほか、業務の効率化・標準化、IoT活用による製造現場の品質・生産性向上に繋げるなど、全社一丸となって仕事のやり方を変えていきます。

最後に2021年夏には、1年遅れでの東京オリンピック・パラリンピックが行われました。コロナ禍での開催は賛否両論ありましたが、筋書きのないドラマが展開され、皆さまも大いに感動されたことと思います。特に団体戦では一人ひとりの力がチームワークによって大きな力となり、強豪に勝つという場面も多く目にしました。これは私たち会社の活動にも繋がることで、新生アイシンは、アイシングループの力を結集し、トヨタグループをはじめとする外部との連携で、これらの難局を克服し、より良い未来づくりに貢献できるものと確信しております。皆さまも新生アイシンの今後の活躍にご期待ください。